



〈書評〉森本芳生著 『近代公教育と民衆生活文化-柳田國男の〈教育〉思想に学びながら』 (明石書店・1996)

森田, 満夫

(Citation)

研究論叢, 4:31-34

(Issue Date)

1996-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81008591>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008591>



書評：森本芳生著『近代公教育と民衆生活 文化—柳田國男の〈教育〉思想に学びながら』 (明石書店・1996年)

森田 満夫

はじめに

本書のテーマである近代公教育（批判）論／民衆教育論には、著者である学兄森本芳生氏自身のくぐってきた貴重な大学の寮生活迄を含む学校教育体験や学校階梯を上昇することへの疑問、それをベースにした近代教育（学）への違和感と再生への期待が根深くかかわっている（本書「〈教育学に辿り着くまで〉—あとがきにかえて」373-378頁参照）。

そして、そのような問題意識をもつ著者であったからこそ、筆者も著者との〈出会い〉を語らずして、本書を紹介することはできない感じがあった。個人的なエピソードのような叙述になりそうであるが…。

1. 著者との〈出会い〉

著者も認めるように、我々は「大学院時代からの友人で、…全く違う個性」（本書377頁）として〈出会う〉のであった（著者は1982年、筆者は翌1983年に神戸大学大学院教育学研究科学校教育専攻に入学した）。著者は、同じゼミ（現神戸大学名誉教授の齋藤浩志先生の研究室）の唯一の先輩であった。そのためか、我々は忌憚のない論議を、毎日のように交わっていたようである。

例えば近代公教育批判をめぐり、一方で超近代主義（ポスト・モダン）的に「脱学校論」を説くなら、…それに反発するかのように「現代の学校の再生とはなにか」をむきになって説くというぐあいであった。それは、まさに果てしない「〈結論の出るはずのない議論〉」（本書337頁）を交しあう距離感から始まった〈出会い〉であったように思う。（観念的なディベートをするような当時の筆者の未熟さも、あったが…。）ともかく、著者の社会思想論の膨大な文献紹介の旺盛さと電話帳の如くなった柳田國男研究（原稿用紙500枚を超える修論であり、そのエッセンスは加筆され本書第一部にまとめられている）の分厚さは、当時から氏の非凡な研究意欲を示すものであった。また「同和道德教育論演習」（齋藤浩志先生の大学院ゼミ）の定刻終了後も、なお夜の8～9時まで…、ときには杯を交しながら氏と自主的なゼミに、ふけることもたびたびであった。

このように、著者とのかわり合いは楽しくもあり、緊張感もある〈出会い〉と一定の距離感を保った不思議なものであったように思い出される。

2. 教育実践の事実から学ぶ

しかしながら、そのような緊張感・距離感が微妙に共鳴しつつあるものへと、変わっていった時期があった。それが、著者自身が看護学校・大学等非常勤として教育実践にかかわり、自らの実感を「教育実践の事実」として議論の俎上に乗せていった時期であったと思う。

これは、筆者にとっても同様であった。この時のエピソードは省略するが、お互いの実践－伝達的な講義ではなく、看護学生等の感想や声を〈教育学〉の授業に生かそうと文集・教材づくりの工夫をしたこと－を交流できたことは、教育実践の事実（教育的価値の実現過程）を大切にす
る氏との第二の共鳴的な〈出会い〉であったように思う。

その後、齋藤浩志先生の導きのもと、我々は教育実践の事実を探求する研究に関心を持っていた。それを契機に「教育実践における〈信頼論〉の課題」及び「教育実践における〈人権〉の位置」のテーマをとりあげ、互いが共同研究していくようになっていった⁽¹⁾。

かつて、人一倍学校や「教育学への嫌悪感」が強かったと述懐していた著者が、教育実践論を学校批判にとどめず、「ようやく学校における教育実践の問題を人間の〈相互解放〉の場として考えようとする問題意識を培った」（本書376頁）時期がこのころと重なっていたのではないだろうか。

3.近代公教育批判を基軸にする研究

さて、こうした経緯に同時平行して、著者がこつこつ進めていたのが、今回上梓した本書の研究なのである。本書を通底するものは、「近世の村共同体社会以降の『民衆の生活文化としての習俗における人間の学び』から乖離した近代公教育を批判的に照しだす」ベクトルのように思われる。それらの初出は、以下のとおりである。

序

「民衆生活文化への着眼」（1983年大学院齋藤ゼミで大田堯著『教育とは何かを問いつづけて』・岩波書店を読み、当時ゼミ員として著者が書いた感想文下書き原稿、ただし題名は今回つけている）

第一部

第一章「柳田國男〈教育思想〉成立試論」（神戸大学教育学部研究集録第81集(1988)・第82集(1989)）

第二章「柳田國男〈教育思想〉の地平」（雑誌『フォークロア』第4・第5号・本阿弥勒書店(1994)）

第二部

第一章「わらべ唄の民衆教育史的研究」（神戸大学教育学部研究集録第83集(1989)）

第二章「民衆文化史における大正童心主義の位置」（1986年度神戸大学教育学部「日本教育史演習」の報告を基に大幅に削除・加筆・修正を加えた。）

第三章「小林一茶にみる『我が子』意識と民俗の感性」（阪南学会『阪南論集』・第31巻第2号(人文・自然科学編・1995)）

序では、「農民兵のたくましさ」と東京帝国大学出身のエリートである「自己の無力感」に気づいた大田堯氏の問題関心に触れつつ、そこから「民衆の生活と歴史」の研究に影響を受けた若き著者の思いが読み取れる。

それは、また「やっと1960年代になって筆者が柳田先生から多くのことを学びはじめ」たという大田堯氏が「社会科学研究としての教育学」の限界を感じ「人間研究のそれ」へと、つまり柳田民俗学の提起した民衆生活の研究へと問題関心を深めていったさまとも重なるようにも思われ

る⁽²⁾。それゆえ「政治変革と制度を通じた人間解放」ではなく、人間の精神・感性・感覚の解放をこそ自分の教育学研究のテーマであるという著者のことばが、いまさらにも思い出される。

第一部は、氏の修士論文を基にまとめた柳田の思想研究にあたる。欧米の翻訳学問を信じ、それによって「無知な」民衆を〈啓蒙＝教育〉の客体としていくことを本気で考える知識人柳田から、民衆の生きざまにある本当に合理的なものを―〈地方の論理〉・〈生活者の論理〉―を探ろうとする民俗学者柳田の思想的転換について展開している。この問題意識は、おそらくは先行する教育思想研究が積極的に明らかにしてこなかった部分であり、その点で意欲作であると思う。

第二部は、丹念な資料収集に基づく村落共同体における民衆文化の考察である。

特に、民衆の卑猥な性的なわらべ唄が、国家の論理に介入され「教育的配慮」のもとに童心主義的な学校教育に取り込まれるさまをとらえている（第二部 第一章）。

また、つぎの「七つの子」の童謡をめぐる民衆文化史的考察は、作者である野口雨情の問題を通して、学校が「正しい」童謡を教え、童謡本来の土着性と「生活の論理」を空洞化させていった経過を、学校文化（教育）によって巧妙に統御された感性の問題としてとらえようと試みている（第二部 第二章）。

さらに、小林一茶の俳句にみる濃厚な〈わが子〉意識を浮き彫りにしようとしている（第二部 第三章）。それは、通説としての一茶の淡泊な子ども観―多産多死社会の近世の「子どもへの命の関心の低さ」―とは異なる、近代を先取りした童心主義的子ども観の〈教育意識〉の萌芽を描こうとする。

4.2.3の雑感

これらが、「本書あとがき」で著者が述べるように、大学時代(1976年入学)以降の生活史の実感を含めた20年来の「教育学へ辿り着くまで」の力作であったこと、一貫して近代公教育への問題意識を追求しつづけ柳田國男研究からわらべ唄の民衆文化・近世研究へと広がりを見せていることに近代公教育批判論としての民衆教育論の発展があったのではないかという感想を持った。

感想としてもうひとつあった。というより本書に触発されて、筆者自身の感じた課題もあった。それは、「民衆・子どもにとって近代教育」とはいかなる問題であったのかという「結論ののではない問題」（本書337頁）なのであるが…。

著者の指摘のように、たしかに近現代の国家および市民社会の民衆（文化）への抑圧が〈教育＝矯正・啓蒙〉、教化・インドクトリネーションによってすすめられた現実もあったし、それは現にいまも垣間見られる現実（教科書検定制度や学習指導要領の現代教育内容統制の状況等々）とも思われる。

が、〈近代の可能性〉、つまり〈市民社会の可能性―たとえば、村落共同体にもあった封建的な差別的な身分社会及び人間関係を破棄していった個人の解放・人間の平等・人権・子どもの権利・女性の権利・少数者の権利の保障という理念の持つ人間解放の可能性―〉をどう位置づけるかということであった。

本書第二部で、著者は、上からの「近代化」の過程で「日本在来の」性的な卑猥なわらべ唄等の民衆文化や感性が抑圧されていったさまを考察しているが…。

それを進めてきた明治以降の国家の統制的な学校教育のありかたや、そのもとで学校文化を内面化して、立身出世主義を志向していく中産の都市生活者などの近代の「市民社会」のありようを批判的に考察している。

それは上からの統制を行なう国家の論理だけではなく、その論理に絡めとられる近代の市民社会への問いであるように見受けられた。そして、「卑猥なわらべ唄等の民衆文化」を下品なものとして抑圧していった「市民社会」の問題の延長線上にあるかのよう（?）、現代の〈教育〉の課題を、以下のように捉えるのであるが…。

「つぎに『発達加速現象』などといわれる現代の子ども・青年をめぐる状況下で、性に関してこれ以上彼らに抑圧を強いることは無理だということである。…〈中略〉…他方で抑圧された性感覚をもった人間をつくりあげていこう。性も含めた『子どもの人権』が考えられなければならない」（本書222-223頁―傍点は筆者）

ところが、著者自身が言及する、このような『子どもの人権』という考えかたを生み出してきたのは、ほかならぬ近代市民社会の「理念・理想」ではなかったであろう。

「結論のではありませんが議論になるかもしれないが、教育実践を切り拓く「理念・理想」の先導性・可能性を考えると（³）、そのような〈近代の可能性―当然限界を含むものでもあるが…〉をどう位置づけるべきか（?）という課題を感じた。その意味で、本書から一貫した「近代化」批判論を学ぶというより、むしろそれに触発されて、それを越える〈近代の可能性〉を捉え直していく課題を強く感じている。

[註]

- 1) その一端は、齋藤浩志編(1992)『教育実践学の基礎』青木書店の中でまとめている。
- 2) 大田堯(1983)『教育とはなにかを問いつづけて』岩波書店、66-68頁、161-162頁参照。
- 3) 例えば、矢川徳光(1973)『マルクス主義教育学試論』明治図書(145-147頁)を参照するなら、1970年代の国民教育運動を意識して、教育の実践や運動を切り拓く「理念・理想」の「先導性・可能性」について、こう捉えられている。「教育の運動」や「学校教育を創る」事業の方向にむかって、「…思想がまえをもって働く」という理論的・実践的な平明な原則として捉えられているのである。言い換えれば、この原則を「教育実践を切り拓く『理念・理想』の先導性」とみなす場合、教育実践を担う人間自身の「意識・思想・理念が持つ教育力、組織力、変革力を重視」することが、現代の多様な教育運動や教育実践にとってもどれほど重要であろうかということである。事実、今日でも、かつて脱（又は無化）学校論的な状況認識を持つ者のなかにさえ「学校は支配のための単なる道具にすぎない」とか「権力の論理」の再生産の場にしかすぎないという考えかたを受け入れる必要はないとして、子どもの目の前にいる大人や教育者の持つ「理念・理想」の実践的な民主的可能性を直截に述べる論も散見する（マイケル・W・アップル(浅沼・松下 訳1992)『教育と権力』日本エディタースクール出版参照）。

このような「教育実践を切り拓く『理念・理想』の先導性」を説く指摘を、イデオロギーの問題とみるのではなく、平明な理論的・実践的原則として捉え、そこから筆者は多くを学んできた。それゆえに、今日において教育実践を切り拓く近代社会の「理念・理想」の生成を教育思想の問題としても軽視できないのである。

(もりた みつお)

※本稿は、兵庫県教育科学研究会発行『兵庫教科研ニュース』第51号(1997年4月)に掲載した同名書評に加筆したものである。